

MiYAGi

まちづくりと 地域支え合い



CONTENTS

アンケート結果について話し合う宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局スタッフ
(左から佐藤正主査、菊池琴美主事、及川一之事務局長)

2-5 **コロナ禍に立ち向かうために**
生活支援体制整備への影響アンケート報告
アドバイザーに聞く 渡邊典子氏 (さわやか福祉財団 インストラクター)

6 **読んで押さえる講義のツボ**
「地域のお宝」と福祉の交わり
永坂美晴氏 (兵庫県社会福祉協議会 生活支援コーディネーター推進員)

7 **県外アンテナ**
お宝で地域づくりの好循環 沖縄県北谷町

8 **まちづくり短信**
宮城県長寿社会政策課
宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局 (宮城県社協)

宮城県内外の
生活支援コーディネーターおよび協議体の
取り組みを発信しながら、
住民や専門職・関係機関の意識を高め、
最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける
社会づくりを目指します。

vol.29
2020.7

コロナ禍に立ち向かったために

したいこと、できること、すべきこと アンケート結果概要報告

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局（宮城県社協）が4月、「新型コロナウイルス感染症による生活支援体制整備事業への影響について」の市町村への緊急アンケートを実施。寄せられた回答から、コロナ禍の地域づくりの困難だけでなく、生活支援コーディネーターの知恵や工夫、住民の日常的な支え合いや見守りの力強さも浮かび上がった。その内容を紹介する。（回答を抜粋、整理し、必要に応じて記述を補い、8つのテーマで分類）

テーマその1 お宝探し

あえてまち歩きに出かけます。コロナ前はこうしたことに時間をかけられませんでした。感染予防に配慮しつつ行き会う人と会話をします。

これまで行ったことのない集いの場を訪ねます。公園、寺社の境内、早朝のごみ集積所などなど。そこに住民が集まることはわかっていますので。

いまだからこそ担当地域の歴史・文化に関する資料を収集、整理したいと思います。広報紙で取り上げ、地域を見直すきっかけにしてもらいます。

野外でのラジオ体操、移動販売、畑仕事など3密になりにくい集いや介護予防的な活動の場を訪問します。

テーマその2 連携・協力

所属機関をはじめ行政や地域包括支援センター、社協など関係機関の職員から「地域のお宝」情報を聞き取り、外出自粛解除後のアプローチを準備します。

生活支援コーディネーター同士でお互いの活動状況や地域のお宝に関する情報を交換、共有。さらに「いまできること」を検討したいです。

生活支援体制整備事業の方向性を改めて関係機関で協議し、認識を共有します。

商工会と連携し、商店・流通事業者らの配達や送迎などの生活支援サービスの「見える化」を検討中です。

生活支援ボランティアが3密を避けてできる活動のアイデアを募ろうと思います。



通信アプリ「LINE」やBBS（電子掲示板）などICT（情報通信技術）を活用した、直接顔を合わせなくてもできる、県内の生活支援コーディネーターの情報交換の場がほしいです。コーディネーターの孤立防止にも役立ちます。

テーマその3

地域の世話役、ボランティア、住民団体役員らに電話で活動状況などを聴取。これら人物・団体と生活支援コーディネーターとのつながりを維持したいです。



広報・働きかけ

メールマガジンを週2回配信。地域での見守りを促したり、自宅でできる体操などの情報を提供しています。

手づくりマスクやコロナ関連情報チラシの配布、弁当配食の機会を利用して個別訪問を行い、地域の動静把握に努めます。

コミュニティFM局や防災行政無線を活用、健康づくりや孤立防止を呼びかけます。

これまでのお宝探しの成果を整理し、広報紙への掲載、配布を準備中です。

自宅でできる体操、3密を避けられる活動、感染予防の工夫などの情報をチラシや広報紙で地域住民に提供するつもりです。

裁縫上手の住民がマスクをつくり、近所の高齢者らに無償で配布。社協にも寄付してくれました。元々の地域のつながりがうまく生かされています。

テーマその4

お宝的活動

屋外でのラジオ体操を始めた人たちがいます。

自宅でできる運動を広報したところ、近所の住民同士で声をかけ合って積極的に地域に普及させようとし始めました。



公共施設は使用不可でも、私有地開放のゲートボールコートでは愛好者が感染予防に配慮し活動を継続。貴重な運動と交流の機会になっています。

地域の支え合い拠点施設で集まって行う予定だったキルトづくりワークショップを、自宅作業方式に改めました。高齢女性ら150人以上が参加。集まったキルトで支え合い拠点の「のれん」を制作しました。

仲のいい人たちが電話で連絡を取り、3密を避けつつお互いの家を行き来し、野菜などをおすそ分け。地域の小さな見守りと交流は継続しています。



一人暮らしや日中独居の人への声かけ・見守りを、近所の人たちが変わらず実施しています。

フレイル予防に畑仕事をとの要望がありました。場所の確保に向けた支援などを行っています。

コロナ禍に立ち向かうために

したいこと、できること、すべきこと アンケート結果概要報告

いまはむしろ地域における見守りの重要性を訴える好機。見守り情報の収集や連絡調整のあり方を関係機関と協議したいと思います。

生活支援コーディネーターが制作したコロナ関連のチラシ、広報紙を自治会、老人クラブなどを通じて住民に配布。配布のついでに気になる人を見守ります。

テーマその5

見守り

近所付き合いのなかでの、さりげない見守り・見守られを推奨。近隣同士の「顔の見える関係」の重要性を再認識するきっかけになればいいですね。

散歩で通りかかった際、庭にいた高齢者に声がけする地域住民の様子を地域包括支援センター職員が目撃し、日常の見守り・見守られの実態を確認、共有しました。



テーマその6

懸念

「集う、話す」といった地域づくり・つながりづくりの基本が、コロナの影響で「怖い」「必要ない」と長期にわたり忌避されることが心配です。

2か月ほど休止を余儀なくされた住民活動が、果たして円滑に再始動できるでしょうか。できない場合の支援のあり方は？

地域の「気になる人」の様子をタイムリーに把握できなくなりました。今後はどうすれば？

サロンやサークルなどの住民活動を推奨・支援したい気持ちと、感染防止を図る必要との間で強い葛藤があります。

台風19号の被災地域のコミュニティ再生に急ブレーキがかかっています。

兼務する保健・福祉・介護関連業務のなかで、生活支援コーディネーターとしての地域づくり支援業務の優先順位が低下しています。

テーマその7

協議体

協議体に限らず、さまざまな行事が年度後半に集中する可能性があります。日程調整と会場確保が難航しそうです。行事日程が過密化して参加者も集まりにくくなるでしょう。冬季にコロナの第二波やインフルエンザ流行があればさらに困難が予想されます。

構成員全員が通信アプリ「LINE」を使用可能であれば、これを活用して協議体を開きます。LINEに対応できない場合は電話協議体とします。構成員に事前にテーマを伝え、電話などで意見を聴取。集まった意見をまとめて後日配布します。

事業計画

次年度と合わせた2か年で計画を実施する方向で、事業日程を練り直す必要があるかもしれません。

今年度事業の消化状況に応じて、次年度への延長や繰り越しも検討します。

今年度の実施計画が達成できないとしても致し方ないでしょう。コロナ問題は長期化が見込まれるようなら、次年度以降、感染予防を前提とした計画内容にしていきたいと思います。



生活支援体制整備事業の一つ一つは単年度で実施・評価するものですが、地域づくりは単年度では完結せず、一定の目標達成には中長期にわたる取り組みの積み重ねが必要。時々状況に応じた計画の変更は、やむを得ません。

アドバイザーに聞く

地域づくりの新たな可能性



渡邊典子氏

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議運営委員として生活支援体制整備事業のアドバイザーを務める。NPO法人ほっとあい(大河原町)副理事長、公益財団法人さわやか福祉財団インストラクター。

地域づくりが自粛一色となり、住民も生活支援コーディネーターも萎縮しているのではと心配したが、アンケート結果からは、感染予防に配慮しながらナチュラルな資源(＝地域のお宝)を生かそうとする実践が頼み、頼もしく感じた。

おすそ分けやお茶飲み、車の乗り合わせといった日常の集いや支え合いには、以前から「食中毒を出したら」「事故を起こしたら」「お茶飲みに呼んで途中で転んだらどうする」などと、万が一の責任を問おうとする声がある。だが、そもそもこれらは、事業ではなく、住民同士の信頼と優しい気遣いに基づく行為だということをお忘れてはいけない。

コロナ禍のつながりづくりや支え合いも似たようなものだ。危ないからとやめてしまうのではなく、継続の工夫

をみんなで考えたい。おすそ分けと食中毒の話で言えば、食品衛生の知識を地域で共有する機会を設ける、さしあげる・いただく際のルールやマナーを取材して広報するといったことでもいい。

地域の見守りや支え合い、つながりのたいせつさと、フォーマル、インフォーマル、ナチュラルの三つの社会資源のバランスの重要性が、コロナ禍で再認識されたと思う。

通信アプリ「LINE」などの活用や、生活支援ボランティアグループの3密(密閉、密集、密接)回避の活動模索といった新たな試みにも注目したい。

マイナスをプラスに転じる、新たな可能性が開かれつつある。私たちは必ずこの危機を乗り越え、進んでいく。



「地域のお宝」と福祉の交わり

永坂美晴氏



宮城県生活支援コーディネーター養成研修の【地域福祉コーディネート基礎・実践研修】は、「個別支援と地域支援」などをテーマに事例検討のグループワークを行う。今年1月14日の同研修（会場：柴田町地域福祉センター）で、講師の永坂美晴氏は、本題に入る前、ある女性高齢者との私的な交流について語り、専門職が「地域のお宝」に関わる際の心構えを示した。研修資料には載っていない、その貴重な講義内容を紹介する。



明石市は30万都市なんですけど、住民も専門職も、把握できるのは本当にわずかな範囲。その目に見える小さな範囲で、これからどんなふうに助け合って生きていくかがとても大事になる。

10年ほど前、犬の散歩をきっかけに偶然知り合ったおばあちゃんがいる。長く一人暮らしを送っていて、いま83歳。料理が得意で、山登りもするパワフルな人。しょっちゅう電話をよこして、「きょうはご飯つくらんでええで。私がつくっといた」と手料理をおすそ分けしてくれる。おせち料理も毎年つくってくれる。近所のお年寄りたちにも、盛んにおすそ分けをしている。

おばあちゃんは私の職業は知らないけど、仕事の内容をうすうす感じ取った頃か

ら、「あそこのおばあちゃんここに、ご飯持っていったらな、こんなことで困ってはったで」と教えてくれたり、「介護保険の申請してあげてなあ」と本人の代わりに頼んだりするようになった。「永坂さんに言うたらスムーズにことが運ぶなあ」とわかっている、私に近隣の高齢者の情報をどんどん寄せてくれる。

おすそ分けや情報提供で、むしろ私が助けられている。私がお返しをしようと何か持って行くと、「水くさい。私がやってんのがええんやから」と怒る。おすそ分けや見守りは自分の役割だと思っている。その気持ちをくんであげないと。おばあちゃんを差し置いて、私があんまり出しゃばってもいけない。

このおばあちゃんみたいな、まちの資源（＝地域のお宝）と福祉が、うまく交わるようにすることが重要。

あるとき地域のボランティアに、一番気になっている高齢者のニーズは何かと聞いてみた。すると「永坂さん、あんたらみたいに難しいこと、なんぼ言ったってあかんで。私らが気にしとんのはな、今晚のおかず何しよかっていうことや。それを（本人が）考えられへんようになったときに（生活に）困るんや」と言われた。

一人暮らしの人が、今晚のおかずをきちんと用意できるかどうか、当たり前のような日々の営みをこなしているかどうか。そこを見て、（対応を）考えることが、縦割りでない本当の福祉だろうと思う。

PROFILE

兵庫県明石市在住。市望海在宅介護支援センターの主任介護支援専門員や明石市社会福祉協議会の第1層生活支援コーディネーターなどを経て、現在は兵庫県社会福祉協議会の「生活支援コーディネーター推進員」。看護師でもある。

お宝で地域づくりの好循環

沖縄県北谷町

【北谷町(ちゃたんちょう)】沖縄県中部の都市圏に位置。人口2万8832人、1万2313世帯、高齢化率20.2%(2020年3月末)。生活支援コーディネーターは、町社会福祉協議会に1人を専任配置。11行政区が第2層を構成、コーディネーターは1、2層を兼務。生活支援体制整備事業を所管する町福祉課(地域包括支援センター)と密接に連携し、住民同士のつながり、集いの場、支え合う暮らしづくりなどを「北谷町のお宝」として地域づくりに生かす。



意見交換会の様子(北玉区・2019年5月22日)



お宝認定証授与式(2020年1月29日)

北谷町では、高齢者保健福祉計画の地域プランの策定と実践を話し合う住民主体の「意見交換会」が行政区ごとに組織され、毎年度3回ずつ会合が開かれる。主なメンバーは自治会・老人クラブの役員、民生・児童委員、ボランティアグループの代表、地域づくりの実践者などで、町社会福祉協議会の地区担当と同計画を所管する町福祉課の職員や保健師が加わる。2018年度からは生活支援コーディネーターも参加、第2層協議体と位置付けられた。

行政区の一つ、北玉区で2019年5月に開かれた第15回の意見交換会には、計11人が出席。はじめに、地域プランに盛り込まれた地区公民館でのコミュニティ・カフェや、菜園整備とそこで収穫

した野菜で料理を振る舞う交流イベントなどの実施に向けた話し合いを行った。続いて生活支援コーディネーターが、「北谷町のお宝」について具体例を引きながら説明。メンバーには地区のお宝情報を出してもらった。

ここで言うお宝とは、介護予防や見守り、支え合いの基盤にもなる住民活動や集いの場のこと。近隣同士のお茶飲みやおすそ分けから、畑仕事・庭仕事、サークル活動、サロン活動、ボランティア活動、飲食をともにする親睦会、困りごとがあっても助け合って解決できる住民関係まで多岐にわたる。

従来、「高齢でも自宅で暮らし続けるのに役立つ地域資源」とは明確に意識されなかった活動や場にもお宝として光を当て、その意義と価値に気づいてもらう。意見交換会で新たに得られたお宝情報は、生活支援コーディネーターが取材する。その成果を再び意見交換会で示し、地域プランの策定や実践、支え合いの関わりづくりなどに結びつけられるようにする。一連の流れを繰り返し、お宝を生かす好循環「地域づくりのループ」を生み出す狙いだ。

2019年度は、ループを町全体に広げようとお宝発表会を企画。2020年1月29日、町の生涯学習複合施設のホールを会場に「お宝認定証授与式」と銘打つ発表会を開いた。

発表会では、生活支援コーディネーターが7つのお宝を紹介したあと、その個人・団体に対し町長が認定証を手渡した。会場には100人近い町民が詰めかけたほか、県内各市町村の生活支援コーディネーターら約40人が見学に訪れた(※発表会は県生活支援コーディネーター養成研修に組み込まれた)。

さらに同3月、お宝情報の専門冊子も編集。今年度中に発刊し、広く配布して一層のループ拡大を目指す。

「あるものを生かす協議体」と「地域づくりのループ」で、生活支援体制整備事業が着々と進んでいる。

利



宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局のスタッフ4人(写真右側と)、宮城県長寿社会政策課で生活支援体制整備事業を担当する皆さん

まちづくり通信

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局
(宮城県社会福祉協議会)
(2020年4~6月期)

アンケート結果から見えてきたこと 宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局

今回実施したアンケートの結果(2~5頁参照)からすると、「積極的に人と会えない」「訪問できない」という状況にも関わらず、生活支援コーディネーターのもとには地域の情報が入り、住民活動のある程度把握できるようです。それは、見えにくい互助や支え合い(=地域のお宝)を見つけ、磨き、価値を認めるという地道な活動をとおして、地域住民と「顔の見える」関係性を築いていたからこそでしょう。

生活支援コーディネーター同士での情報交換が、活動に役立つとの意見も多くありました。県内の一部地域では、以前から生活支援コーディネーターが市町村の垣根を越えて自主的・定期的に情報交換をしています。そうしたネットワークは、コロナ禍の非常時にも生きるものだとわかりました。

事務局としても、生活支援コーディネーターや行政の事業担当者らが、顔を合わせて意見交換する場づくりは必要であると考えています。

今後も県内の情報を集約・発信し、地域づくりに携わる皆さまのお力添えもたまわりつつ、市町村の生活支援体制整備事業の推進支援に努めてまいります。

このたびはご多用中にも関わらず、アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

地域づくりと地域包括ケア推進 宮城県長寿社会政策課

宮城県長寿社会政策課では、誰もが安心して暮らせる地域づくりに向けた地域包括ケアシステムの充実に向け、地域支え合い・生活支援体制の構築に取り組んでいます。

令和2年度の新しい取り組みとして、「市町村伴走型支援モデル事業」の実施を予定しています。宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡協議会事務局(宮城県社会福祉協議会)や、学識経験者などのアドバイザーと共に支援チームをつくり、モデルとして設定した3市町の特性に合わせたオーダーメイドの地域づくり・地域包括ケアの推進を支援していきます。

このような生活支援体制の整備を軸に、高齢者の生活機能向上を目指す介護予防の取り組みなどと連携を図り、より効果的な展開を目指していきたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症の影響下においては、「人と会うこと」や「集うこと」への自粛が求められました。このことは、一人ひとりの健康づくりや、地域コミュニティの活動の継続に大きく影響するものと考えています。

感染症の影響は、流行期か否かに関わらず、今後も続いていくものと考え、どういった対応や対策が必要なのか、皆さんと一緒に取り組んでいきたいと考えています。